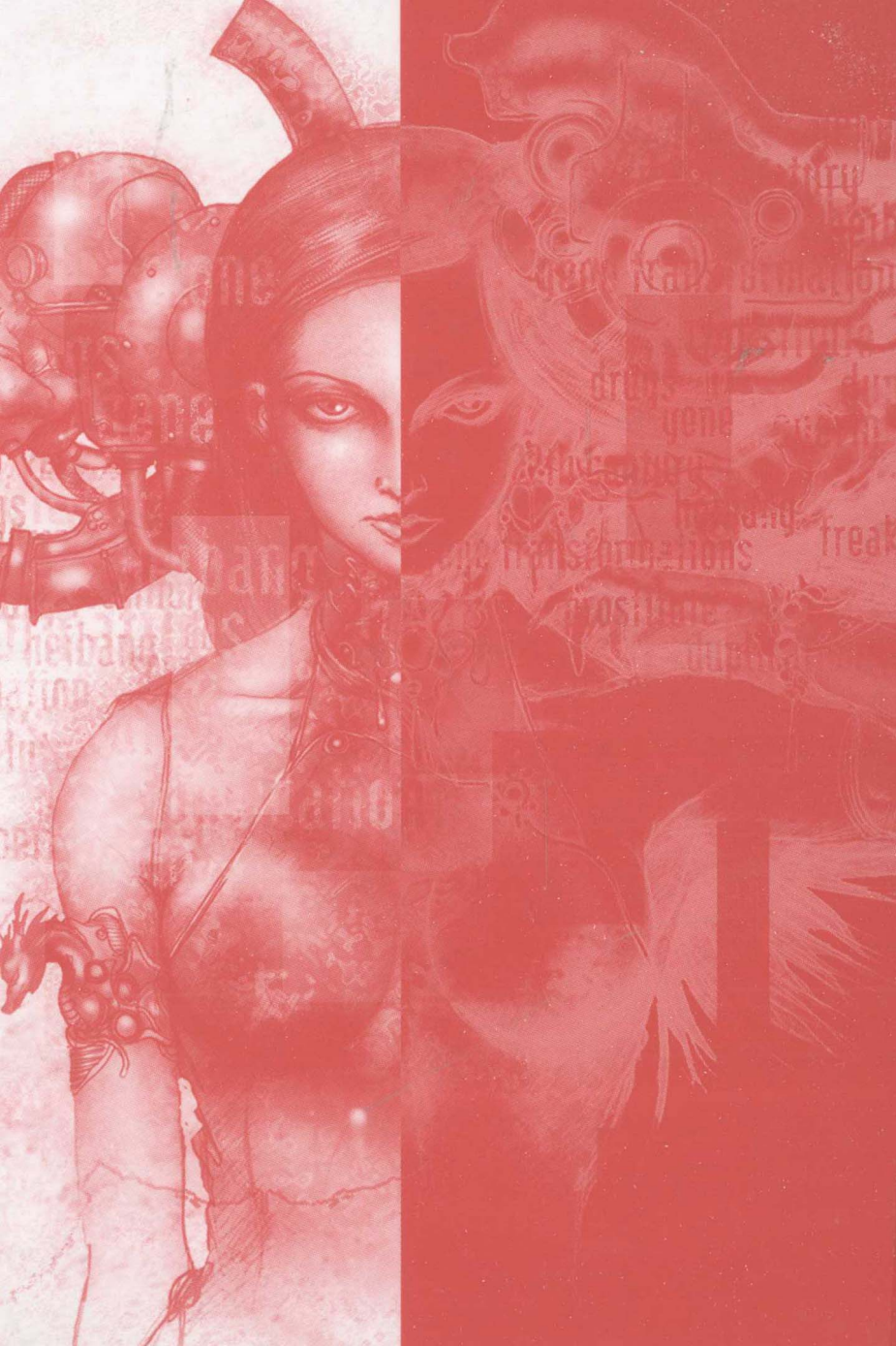




谷 甲州

TANI Koushu

エ
リ
ク

早川書房

検印廃止

エリコ

一九九九年四月十日 印刷
一九九九年四月十五日 発行

著者 谷 甲州こうしゅう

発行者 早川 浩

発行所 株式会社 早川書房

郵便番号 一〇一・〇〇四六

東京都千代田区神田多町二ノ三

電話 三・三五・三二二六代表

振替 〇〇六〇・三・四七七九

定価はカバーに表示してあります

©1999 Koushu Tani

Printed and bound in Japan

印刷・三松堂印刷株式会社 製本・大口製本印刷株式会社

ISBN4-15-208218-6 C0093

乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取りかえいたします。

エ

リ

コ

目次

第1章	南大阪三区	5
第2章	逃亡	36
第3章	潜伏	62
第4章	捜査	89
第5章	魔都	116
第6章	ラオタイ 老大・ロ	143
第7章	寺尾医師	170
第8章	尋問	199
第9章	帰国	231

第10章 霞が関 257

第11章 監禁 285

第12章 反撃 312

第13章 突破口 338

第14章 研究都市 366

第15章 学校 389

第16章 疑似人格 418

第17章 包囲網 446

第18章 終結 472

あとがき 505

装画
装幀

藤原ヨウコウ
ハヤカワ・デザイン

第1章 南大阪三区

1

通りに足を踏み入れたときから、その男の存在には気づいていた。一定の距離をおいて、後ろからついてくる。物とりの類ではなさそうだった。根拠があるわけではないが、なんとなくそんな気がした。物腰が犯罪者とはちがっているし、妙に堂々としている。それなのに、尾行に気づかれないよう注意を払っているのがわかる。ことさら姿を隠すわけではないが、めだたない足の運びで通りを歩いてくるのだ。

かといって、警察による監視とも思えなかった。昼間でも物騒なこの界限には、所轄の警官でさえ減多に近づかない。まして他の署の刑事が、捜査のために乗りこんでくるはずはなかった。

どうも気になった。左耳のピアスに装着された防犯シ

ステムが、さっきから微かな警告音を発している。マーキングしておいたその男が、次第に距離をつめてきたようだ。しかも行動が大胆になったのか、カメラが男の姿を認識する回数が増えている。

それ以上、無視するのは危険だった。エリコはさりげなく左手のブレスレットを操作して、システムのモードを切りかえた。最小化しておいた背後の映像が、視野のすみに浮かびあがる。髪どめに内蔵されたカメラが、後方の様子をとらえているのだ。若い女性が街を歩くときには、この種の防犯システムは欠かせなかった。

数分前にくらべて、男の姿はかなり明瞭になっていた。一見したところ、それほど変わった点はない。遺伝子治療や移植手術をうけた形跡もなかった。この街に多い建設労働者のようだ。ただし外国人ではない。くたびれた作業着に、^{こはも}靴の多い地下足袋を履いている。

たぶん仕事にあぶれた男が、暇を持てあまして後をつける気になったのだろう。そうエリコは見当をつけた。かりに被害をうけたとしても、酒代をせびられたり罵声を投げつけられる程度のはずだ。それくらいなら、実害はないに等しかった。意味もなく街を徘徊する不良少年や、中毒症状のすすんだ麻薬常習者ほど剣呑な存在ではない。

そう結論をだして、男のことは考えないことにした。

それでなくても通りには危険が満ちている。まだ昼前だというのに、道ばたには所在なさそうな顔の男たちが座りこんでいた。麻薬でもやっているのか、そんな男のほとんどは眼が濁っていた。だがエリコに眼をむけようとする者は一人もない。うつろな眼を、宙にむけているだけだ。

実際には辻強盗やひったくりよりも、そんな男たちの方が危険な存在だった。なかには完全に眼がいつている者もある。骨と皮ばかりに瘦せて、行き倒れ寸前の男もいた。盗みをはたらくほどの意欲はないが、きつかけがあれば衝動的な行動に走ることもある。何かのはずみで、殺人くらいおかしても不思議ではなかった。

麻薬の常習者ばかりではなかった。この街には違法な改造人間も多かった。動物の組織を移植して、異形の人間に変身してしまうのだ。なかには遺伝子そのものに手をくわえて、獣の器官を発生させるものもあるらしい。

その気になって街をひとまわりすれば、全身に猫の毛皮や耳を移植した娼婦や、牙のような犬歯を唇の端から突出させた用心棒くずれが簡単にみつかるはずだ。

彼らはビジネス上の必要にせまられて違法な手術を受けたのだが、ファッション感覚で自分の体を改造する者

もいた。少し前までは、額から二本の角を突き出す「鬼面」が流行していた。顔を怖くみせるために、山羊や牛の角を頭蓋骨に植えたのだ。かと思うと、魚の鰓や鱗をもつ「半魚人」もいた。たぶん陸で生活することに飽きたのだろう。

そんな手術のほとんどは、もぐりの医師によってなされた。そのせいでフリックスの多くは、深刻な後遺症に悩まされている。人の体に動物の遺伝子をくわえるのは、やはり無理があるらしい。素人治療のせいで薬物中毒になったり、治療費をかせぐために犯罪を重ねている者も少なくない。この街にはそんな者たちも、吹き寄せられるようにして集まってくる。ここでは違法な仕事や薬物も、簡単に入手できるせいだ。

たえず周囲に注意をむけながら、エリコは先をいそいだ。そして角を曲がったところで、ふいに背後から声をかけられた。

「姉ちゃん、なんぼでやらしてくれんねん」

さっきの男かと思つて、エリコは身がまえた。だが、それにしては妙だった。話し方は大人びているのに、声がいづいぶん幼い。防犯システムの反応も消えていた。

足をとめたエリコは、ゆっくりとふり返った。あの男の姿は、どこにもなかった。かわりに煙草をくわえた一

○歳くらいの悪ガキが、下卑た笑いを浮かべながらエリコをみていた。

エリコは冷ややかな眼で悪ガキを見返した。だが少年の眼は、彼女の首から下にむけられたままだった。ミニ気味のスカートからのびた足と盛りあがった胸の間を、いそがしく上下させている。体は子供でも、眼つきは大人とかわりなかった。

おそらくエリコを他所者^{よそもの}とみて、卑猥な冗談でからかう気になったのだろう。たしかに彼女の身なりは、この街では似合わないものだった。

着ているものはクラシックなデザインのスーツだし、ヘアスタイルも地味ながらきちんとセットしてある。一見すれば良家のお嬢様か、若奥様にしかみえないだろう。夜になれば街娼の徘徊するこの街では、不釣り合いなほどの高級感があった。

本当はこんな格好のまま、このあたりに踏みこむべきではなかった。ここは凶悪犯罪の多発する地区だし、通りを歩いているのは得体の知れない男ばかりだった。この少年のように、学校にもいかず半端仕事をしているものもいる。

そんな場所にスーツ姿のまま踏みこむのが、危険なのはわかっていた。この少年でさえ弱みをみせれば、難癖

をつけて金を巻きあげようとするだろう。

あえてドレスアップして乗りこんできたのは、これから会う相手にみくびられたくなかったからだ。だが、街中^{まち}で悪ガキになめられていたのでは世話はない。

エリコの視線に気づいて、悪ガキが顔をあげた。それから、ばつの悪そうな顔で眼をそらした。まるで母親に叱られた子供のように、態度がおどおどとしている。それをみたエリコは、ほんの少しがっかりした。もう少し骨のある少年だと思っていたのだ。

だが少年が顔をふせていたのは、わずかな間だった。すぐに顔をあげると、拳のあいだから親指を突きだすポーズをしてみせた。それから挑戦的に歯をむき出して、次の言葉を吐きだそうとした。その機先を制して、エリコはいった。

「ボクは、なんぼやの」

意表をつかれたのか、悪ガキは呆気にとられて黙りこんだ。彼女は小馬鹿にしたような口調でいった。

「ボク、男娼^{おき}やねんやろ？ おっちゃんらにおいど、掘らして、なんぼの商売してるんのとちがうの」

少年の唇が、わなわなとふるえた。それから吸いかけの煙草を投げ棄て、顔を真っ赤にして何かいいかけた。だがエリコは、今度もタイミングをのがさなかった。

「溜まっとるんやったら自分でかいとかんかい、ボケ！皮もむけてないガキの分際で、えらそなこと抜かすな」それだけいって、くるりと背をむけた。もう悪ガキは、いい返そうとしなかった。かなり歩いてから、ひきつったような罵り声が追いかけてきただけだ。無視して歩いていこうとしたら、急に耳もとで警告音が鳴った。防犯システムが危険を察知して、エリコに急をつげているのだ。

さっきのような、穏やかな音ではなかった。さし迫った危険の接近を告げるかのように、甲高い音で鳴りつけている。その直後に、後方の映像が視野のすみに割りこんだ。

カメラがとらえたのは、異形の大男だった。最初は「鬼面」かと思ったが、そうではなかった。頭頂部から頭丈そうな一本角が突出している。「一角獣」だった。鬼面のような虚仮おどしの改造ではない。喧嘩に勝つために、犀の遺伝子を導入したのだ。この分では手の甲や肩にも、角が生えているのかもしれない。

エリコは背筋が冷たくなるのを感じた。こんな無茶な改造をやる奴は、もともと凶暴な性格をしていることが多い。しかも違法な手術のせいで、たいてい脳が損傷している。その男も例外ではなかった。異様にぎらついた

眼をエリコにむけて、大腿で近づいてくる。後方ではあの悪ガキが、うすら笑いを浮かべながら成りゆきをみていた。

おおかた悪ガキが腹いせに、一角獣をけしかけたのだろう。エリコが角をみて笑ったとか、その程度のことを耳うちしたのではないか。悪いことに一角獣は、一見して薬物中毒とわかる顔色をしていた。もしかすると被害妄想におちいって、異様に自意識がよくなっているのかもしれない。こんなときには、何をいつても無駄だった。

逃げるしかなかった。周囲に人はいるが、とめに入るものがないとは思えない。手近な建物に逃げこんで、助けをもとめる以外に助かる方法はない。

だが一角獣が本気で追ってくれば、その前に殴り倒される。最悪の場合は、この場で殺されるかもしれない。ブレスレットには低出力のスタンガンも内蔵されていたが、それを使う気にはなれなかった。怒りくるった一角獣に刃向かうのは自殺行為だった。

エリコは駆けだした。一気に通りを走り抜けて、目的地にむかおうとした。だが一角獣も、すでに行動を開始していた。カメラを使わなくても、あとを追ってくるのがわかる。地響きのような重い足音が、背後から急速に

近づいてくる。獣のような荒い息を間近に感じて、エリコは短い悲鳴をあげた。

そのときだった。鳴りっぱなしだった警告音に、別の音が割りこんだ。さっきの男の存在をしめす音だった。ふり返ったエリコの眼前に、一角獣が立ちはだかっていた。その後方から、黒い影が急接近してくる。姿を消していたはずの、あの男だった。男は別人のような動きで一角獣に駆けよった。

気配を感じたのか、一角獣は後方に眼をむけた。首をねじ曲げて、肩ごしに後ろをみようとしている。その首が、不自然な格好でゆれ動いた。何かに衝突して、頭部をのけぞらせた——そんな風にみえた。頭頂部に赤い霧があらわれたのは、その直後だった。

噴出した赤い霧は、たちまち視野の大部分をしめた。それが血だと気づいたときには、一角獣の全身から緊張が抜け落ちていた。膝をがくりと落とし、前のめりに倒れようとした。それでも首だけは、逆方向に折れ曲がっていった。そして血の霧の奥から、黒い塊が飛び出した。回転しながら飛ぶその塊は、根元から折れた一角獣の角だった。

血の霧をまき散らしながら、一角獣は倒れこんだ。その後方から、さっきの男が姿をみせた。飛ばされた角を

追うようにして、宙を飛翔している。一角獣の角をへし折ったのは、男のくり出した蹴りだった。

路上に転がった一角獣のすぐ横に、男は着地した。かゝる身のこなしからすると、プロの用心棒のようだ。だが、遣伝子に手をくわえた形跡はなかった。たぶん電気刺激かホルモン投与で、筋肉を強化しているのだろう。もしかすると、職を失ったスポーツ選手かもしれない。暗殺を専門に請け負うヒットマンほどの剣呑さはなかった。

男は無言のまま、エリコに眼をむけた。まるで死人のように、生気のない眼をしていた。肌に艶はなく、頭髪も薄くなりかけている。おそらく四〇はすぎているはずだ。そうやっている、風采のあがない中年男でしかなかった。

エリコはわずかに緊張した。男の目的がわからないだけに、かえって不気味だった。もしかすると、法外な用心棒代をせびられるのかもしれない。そんなことを考えていたら、男はふっと視線をそらした。そしてエリコの後方を指さした。ここはいいから、早くいけ———そういうわれたような気がした。

——黒^{フレイム}帽の自警団員だったのか……この男は、エリコは緊張をといいた。これから会う予定の相手が、

護衛をつけてくれたらしい。といっても、エリコの身を心配したわけではない。単に商品としての彼女を、傷物にしたくなかっただけだろう。

それがわかったことで、ようやく立ち去る気になった。エリコは男に背をむけると、礼もいわずに歩きだした。

2

境界線をこえたことは、街の雰囲気にあられた変化でわかった。すでにエリコは、この街でもっともディープな地区に踏みこんでいた。

道ばたに男たちがたむろしているのはおなじだが、顔つきや体格が眼にみえて変化していた。ここは外国人労働者が大量に住みついている地区だった。彼らは出身地ごとに小さな共同体をつくり、自分たちの生活習慣を守っていた。ヒンドゥ教徒相手の商店では店先で香が焚かれ、隣接する建物の二階からはコーランの朗詠がきこえてくる。ここはそんな雑多な暮らしが混在する地区だった。

もちろんこの地区が、最初からそんな状態だったわけではない。きっかけは、三〇年以上も前に実施された地

区の再開発だった。都市づくりの基本概念は「南大阪二世紀計画・緑と安らぎの国際都市」だったらしい。エリコの生まれる前の話だから詳しいことはわからないが、「福祉を充実させた弱者にやさしい街づくり」をめざしたようだ。

ただし為政者の構想と現実のあいだには、見事なほどのギャップがあった。社会的弱者のための街が、蓋をあけてみたら無法地帯になっていたのだ。再開発のための工事がはじまると同時に外国人労働者が大量に流入し、開発が終わるころには住民の大部分をしめていたせいだ。もともと日本に居住する大多数の外国人労働者が、社会的弱者であるという事実は否定できない。その意味でこの街は、たしかに二世紀的な国際都市ではあった。

おそらく外国人労働者の流入は、これからも途切れることがないだろう。少子化と高齢化の影響で、日本の労働人口自体が減少しつつあるからだ。しかも教育終了年齢の上昇は、肉体労働者や単純労働者の供給を困難にしていた。

その結果、多くの業界では慢性的な人手不足に悩まされていた。管理職のなり手が多くて、底辺をささえる層が存在しないのだ。その隙間を埋めるようにして、外国人労働者は増大していった。彼らのほとんどは違法

居住者だったが、取り締まることは実質的に不可能だった。本格的な取り締まりを実施すれば、日本経済は大混乱におちいるだろう。

もう梅雨がちかいはずだが、通りは乾燥していて埃っぽかった。税収が慢性的に不足しているものだから、メソテンナスに充分な予算をかけられないのだ。プラスチックで被覆された舗装があちこちではがれ、破片が周辺に散らかっている。

そんな通りを、エリコは足ばやに歩いていった。舗装をヒールで蹴飛ばすようにして、薄よごれた街角をわたっていく。この街で足をとめるのは、それだけで危険な行為だった。不用意に道をたずねたりすれば、たちまち辻強盗が集まってくる。

エリコがむかっているのは、中国人街の奥にある建物だった。そこにいたるまでの道すじは複雑だったが、道に迷うことはなかった。事前に家庭用ナビゲーション・システムで、道順を記憶しておいたせいだ。はじめて歩く街にもかかわらず、通りの様子や街角の風景は既視感をともなうて眼にうつる。

もっともナビゲーション・システムは、通りにあふれる騒音やその街固有の体臭までは再現できない。しかも付近の街なみは、予想以上に変化が激しかった。最新バ

ージョンの地図で事前に予習したのに、みないない風景が次々にあらわれるのだ。しかも風景の変貌は、目的地に近づくにつれて大きくなっていった。

いつの間にかエリコは、街角をこえるたびに眩暈を感じるようになった。事前にシステムを通してみた風景と、現実の風景が微妙にずれているせいだ。

だが最初のうちは、その原因に気づかなかった。そして歩きつづけるうちに、ようやく理由がわかった。通りに面した建物に、改装されたあとがあるのだ。それも部分的なものではなく、眼につく建物すべてに手が加えられている。

建物だけではなかった。通り自体にも、いくつか工事のあとがみられた。しかも工事の痕跡がめだたないよう巧妙に偽装されている。もちろん自治体の公共工事などではない。この街に住むだれかが、勝手に街全体を作りかえてしまったのだ。それも外敵の襲撃を撃退する要塞として。

その中でも最大の改造は、バリケードの構築だった。恒常的なバリケードではない。舗装とおなじ色に塗装された鋼鉄の帯が、通りを横断して左右にのびている。おそらく必要なときには、簡単な操作で防壁が路上にせり出すのだろう。ただし通常は舗装面とおなじ高さに沈み

こんでいる。似たような構造物は駐車場の出入り口に設けられているが、ここのバリケードはそれよりもさらに大きくて頑丈そうだった。

通りに面した建物の改造は、それよりさらに徹底していた。外見は普通の建物だが、よくみると窓がすべてつぶされているのがわかる。閉じられたカーテンが、どれも重くたれさがっているのだ。たぶんカーテンの奥は、コンクリートで固められているのだろう。初夏といっている陽気なのに、閉じられたカーテンが風に揺れ動くことはなかった。

眼にみえる構造物でさえ、こんな状態なのだ。この地下には、無数のトンネルが掘られているのではないかもしれないかとすると市街戦にそなえて、戦車くらい隠しているのかもしれない。

それに気づいたとき、エリコは足元の地面が崩れていくような頼りなさを感じた。どうやら自分は、無法地帯の最深部にまで踏みこんでしまったらしい。ここはすでに「国際都市」ですらなかった。日本の中の外国そのものだった。

ここが中国軽犯罪組織「黒幫」^{フレイム}の本拠地であることは、エリコも知っていた。おそらく彼らは、頻繁に他の組織と抗争をくり返しているのだろう。そしてその敵対する

組織の中には、大阪府警もふくまれているはずだ。彼らは街の構造や建物の外観を変化させることなく、街全体を要塞につくりかえてしまった。しかも隣接する地区には、自警団まで配置している。話にはきいたことがあるが、こんな要塞都市の実物をみるのははじめてだった。

漠然とした不安を感じて、エリコは周囲に眼をむけた。無意識のうちに、逃げ道をさがしていたのかもしれない。そのときになって、ようやく気がついた。路上から人がげが消えていた。さっきの男は姿をみせないし、防犯システムも沈黙したままだ。

それなのに、だれかの視線を感じる。あるいは通りに面した建物の奥から、監視されているのかもしれない。

背後をふり返ったエリコの耳に、記憶にある轟音が飛びこんできた。通りで区切られた視界の中を、緑色に塗装された電車が通りすぎていく。高架線路上を走る私鉄だった。それでようやく、彼女は安心した。この街が外部と切り離されているのは事実だが、その外側には日常的な風景がひろがっている。それなら、不安を感じることはない。

エリコは思いきりよく胸をそらすと、顔をあげて通りを歩いていった。

3

その建物は要塞と化した街の一角にあった。そこが防衛すべき拠点というわけではなく、要塞を構成する建物のひとつらしい。もちろん外観は普通のビルとかわりない。玄関わきの壁には「南大阪福祉連合会」のプレートがはめ込んであった。例によって窓がつぶれていることをのぞけば、何の変哲もない雑居ビルでしかない。

チェックされるのかと思ったが、意外にあつさり中に入ることができた。玄関ロビーに人気がなかった。受け付けらしきものはないし、管理人の詰所もみあたらない。がらんとした空間が、表の通りとつながっているだけだ。

不審に思つてふり返つたエリコは、奇妙な違和感に気づいた。わずかな時間のうちに、玄関ロビーの雰囲気に変化している。彼女は首をかしげた。そしてすぐに、その原因に気がついた。さっきは開きっぱなしだった玄関ドアが、いつの間にか閉ざされている。もちろんドアの閉じる音は耳に聞こえなかった。

玄関ドアがロックされていることは、なんとなく想像がついた。それでも、足をとめることができなかった。本能的な恐怖を感じて、エリコはドアに近づいた。ガラ

スドア越しにみる通りの風景が、ひどく遠く感じられる。そしてドアに手をかける寸前、背後から男の声がかえった。

「北沢さんですね。奥のエレベーターで上にきてください。私はそこで待っています」

電子的に合成されたような、抑揚のない声だった。おそるおそるふり返つたが、もちろん人かげはない。そしてエレベーターのドアが、音もなく開いた。中からもれだした光が、廊下を白く照らしている。

度胸を決めるしかなかった。いまさらあとには引けないし、逃げるのはかえって危険だった。それに手ぶらで帰れば、あとで厄介なことになる。エリコは意を決してエレベーターに乗りこんだ。

思つたとおりエレベーターのドアは、エリコが乗ると勝手に閉じた。彼女一人を乗せて、ゆっくりと上昇していく。箱の中をみまわしたが、操作パネルらしきものはなかった。ようやくドアが開いたときには、閉塞感で息がつまりそうだった。

廊下に出たものの、男の姿はどこにもなかった。みじかい廊下に面して、いくつかドアがならんでいる。そのひとつが、開きっぱなしになっていた。吸いよせられるようにして近づくと、背後でエレベーターのドアがすっ

と閉じた。もちろん廊下側にも、エレベーターの操作パネルはなかった。ならんだドアにもノブはみあたらない。のつべらぼうの板が、蝶番でとめてあるだけだ。

部屋の奥で待っていたのは、ゴキブリを連想させる小男だった。やせた体を黒いスーツでつつみ、薄くなりかけた頭髮をべったりと油でなでつけている。頭部が小さいものだから、両耳が異様にとがってみえた。

男はデスクのむこうに悠然と腰をおろし、入室したエリコにうなずいてみせた。デスクの上には通常の事務用端末以外に、さまざまな計測機器がならんでいる。そのことでエリコは、その男が面接係だと見当をつけた。だが、中国人かどうかまではわからない。

——この男と、させられるのだろうか。

これまでの経験から、なんとなくそんなことを考えた。だが男のエリコをみる眼には、性的な欲望は感じられなかった。感情のこもらない眼を、じっとエリコにむけているだけだ。

うながされるままに、エリコはデスクの前の椅子に腰をおろした。男は事務的な口調でいった。

「我々のシステムは、ご存知ですね？ 紹介者の方から、話はきいていると思います」

平板な発音の日本語だった。言葉つきが妙に丁寧なも

のだから、かえって凄味を感じさせる。

「身分を証明する書類が必要だとききましたが」

エリコはバッグを引きよせて、居住証明書をとりだそうとした。だが男は、それを制していった。

「書類は必要ありません。こちらでチェックしますから生年月日と戸籍上の名前のみ教えてください」

そういったときには、端末に手をのばしていた。エリコは緊張に身をかたくした。正直に申告すべきかどうか、ほんの少し迷ったのだ。それから居住証明書を偽造してくれた職人の言葉を思いだした。黒幫の調査能力をみくびらない方がいい、彼らは役所のデータベースにも簡単にアクセスして個人情報を探いだす、そう職人はいつていた。

エリコは覚悟を決めていった。

「二〇九二年四月八日生まれ。戸籍上の名前は北沢慧人です。出生時の性別は男性」

言葉を口にしながら、じつと男の様子をうかがった。

もしかすると、この場で不採用をいいわたされるかもしれない、そう思ったのだ。だが男は、端末から顔をあげもせずといった。

「性別は結構です……。我々にとって重要なのは、現在の体とその機能だけです。両手を出してください」